

此内百八十三間、社人九人覚悟之分
不納分式百六十一間
以上

天正六年つちのえ
とら

二月八日

石垣左馬助

鑑 貞(花押)

竈門勘解由允

鎮 意(花押)

右田兵部少輔

鑑 盛(花押)

上田土佐入道殿
弘岡外記殿

（証書文書）
符

竈門八幡の写経

伊 東 東

昭和三十年十月六日の大分合同新聞才三面に、「鎌倉時代の千手観音」との見出にて、別府市、森清太郎氏の亀川竈門八幡調査の記事が掲載されました。記事中宝治二年の写経の事にふれられておりますので、私も昭和十六年七月二十日、別府市の故福田紫城君と共に、宮司土谷氏を訪い一応所蔵写経を一見させて頂きましたので、当時の手記に拠り此の小篇に筆を執つて何かの参考に資したいと思ひます。

所蔵の写経は明治初年神仏分離の節に、土谷氏宅の天井裏

に揚げられ其儘放置され、歲月を経たるため、自然かなりの虫害を蒙り、加之雨漏のため密着、転読困難なる状態となり調査容易ならず、依つて主として巻末奥書の有無の調査に重きを置き、順次これを見したるに過ぎず。此の日炎暑甚だしく流汗淋漓、帰宅の時間には追われるし、同座の両君にも氣の毒に感じ、心ならず調査の粗漏不備を免れざりしを告白して置きます。

其の結果時代を異にする三種の写経の存することを知れり以下順次述べて見ましよう。

一、大般若波羅密多経才五百六十二果

宝治二年 申三月四日執筆観智

右は只一卷にして横三寸、豎八寸の折本仕立のものにて、

前記森氏の見られたるものと同一のものか否かは記事簡にして不明なるも、同一筆者が同年に筆写せるものなるは明らかなり。

二、断簡なるも左記奥書あり。

応仁二年 子七月十三日書之

三、最も多数現存するものにして大般若波羅密多経なり。奥書あるもの十三巻を検出する事を得たり。製本も不揃ひに

て横三寸、豎八寸一分、八寸、七寸九分、七寸七分等区々

である。行数は何れも五行となつてゐるが、筆蹟は前二者に比すれば甚だしく見おとりがする。

イ、大般若波羅密多經才二百一十四

於千大般若經全部參拾陸躰御神前国分市河氏藤原貞女為

竈門新左衛門尉鑑述祈禱老母置之

神宮寺

永祿二^巳未正月吉日

ロ、才二百四十二

大般若經全部国分市河氏藤原貞女為竈門新左衛門尉鑑述

祈禱老母置之

永祿二^巳未正月吉日

(抹消しあり)

弘治三^丁己三月十二日 宗文書

ハ、才二百四十七

奥書日附同前

ニ、才三百一十五

奥書日附同前

ホ、才四百二

奥書日附同前

ヘ、才四百二十三

大般若經全部国分市河氏藤原貞女為竈門新左衛門尉鑑述

□□□□□□□□□□

□祿二年^巳未正月吉日

光明寺六十二書之

ト、才四百二十五

奥書日附才四百二二同シ

チ、才四百三十八

奥書日附同前

光明寺宗文書之

リ、才四百五

奥書日附同前

光明寺宗文六十二書之

ヌ、才四百七十四

奥書日附ナシ

光明寺書之

ル、才四百八十九

奥書日附才四百二十五二同シ

ヲ、卷数不明

奥書日附同前

ワ、才五百六十九

奥書同前

永祿二^巳未十一月十九日

以上が私の見た永祿写経の奥書を有する全部である。市河氏貞女は竈門鑑述の妻女であろう。弘治から永祿にかけて、大友氏は中国の毛利氏、筑前の秋月氏との関係漸く多事を加

えて来た折柄なれば、妻女が夫君の武運長久を祈つて写経を
発願したのではなからうか。老母がこれを竈門八幡の神宮寺
へ奉納したものと考察せらる。筆者は神宮寺六坊中の光明寺
宗文以外には今の所認めらるゝ資料を缺いている。次に写経
の期間であるが、文禄二年正月吉日とせしものが大部分であ
る。唯一つ才五百六十九のみは永禄二年十一月十九日となつ
ているから、少なくとも永禄二年末迄の日数を要したものと思
われる。才二百四十二の抹消してある弘治三年三月十二日は
何を意味するのであろうか。私は起筆の年月を暗示するもの
であると考えたい。大般若波羅密多經六百巻を只一人の宗文
老の手一つで一年間に完結する事は難事であると察せらるゝ
からである。若し初巻に近いものでも発見さるゝなれば此の
疑問は自然解消せらるゝ問題である。宮司土谷氏の其の時語
られし処に依れば、竈門八幡昇格願の書類作成資料に供する
為、国東町河野清実氏の手元に若干送付しありと聞けり。若
し之等が再び見得る事を得ば、考証は更に一步前進するであ
らう。

(大野郡三重町在住)

白杵流行之ちよんかれ

今泉 弥 佐 助

ヤレ／＼聞てもくんない、いがくり頭の乞食坊主が錫杖振

白杵流行之ちよんかれ

立／＼、くわん^(願)人坊主が一口ちよんかれ、聞てもくん称へ、
つゝら娘のどふ楽はじまり、比者甄鷹七十有余の隠居のじん
はり当時盛りの御歴々様をば、御床机頭とおなづけなされて
即座に退け、己が工^(たく)みをどこそに隠して、忠臣顔して政事は
勝手に、民家を悩ます摩^(ママ)の根げん、御祭所か仏事もさせ称
へ、自分独りが栄花を極^(ママ)め、花の都の吉原見るよな、朝から
晩まで琴や三味せん、争留理長うた舞やら色事するやら、自
由するやらたか狩するやら、是こそ実の面獸心、あげくの
果^(煩惱)ニハお側をはなれぬ、ひけふの赤猫なでる斗り、さわるが
ほんのふ、これハどふじやと言ふが始り、後の入^(ママ)訳聞ずと
よし称へ、夫共見たくバおめの側なら、針箱さがして枕草紙
の四枚目見るよな、違ハ有めへいつの比より、どん腹ふくれ
て身持に成るやら、是に隠居も困たせんさく、どふしたも
じやと気苦勞するうち、思ひ付たる官市の始り、様子をさら
りと打明語りて、お宅に呼寄せお直に見せたる男ハ徳市、お
しけの身分てもつけの幸ひ、名字放され大小取やら御扶持も
はなされ、隠居が中立、たまやが逆立、金屋の取持、聞ニて
目出度おかしい祝げん、又もや隠居はぼんのふ乱れて、京都
のみめよき娘を呼寄せ、水あげなされてどん腹ふくると、百
石あたへて別家ニするやら、筋なき家ニも役義云付、見る人